

図工・美術指導の可能性を広げる情報誌

# 造形ジャーナル

ZOKEI JOURNAL

2013  
Vol.58-4  
No.420



「しゃぼん」(水彩/80.3×80.3cm)2011年 吉田 佳寿  
作家は表紙裏のART ESSAYを執筆しています

**特集** 感じる力、伝える力

開隆堂

## 私の心旅



よしだ かず  
吉田 佳寿 (美術作家)

32歳で美術専門学校に入学し、美術活動を始める。無数の円を色彩豊かに描いた作品等、色を基調とした作品を多数手掛ける。昨年、個展「ミラクル流星群 2012」を開催した。

私は自然が大好きです。よく海や山へ出かけたり、知らない国へ旅したりします。その時に出合う風景や人、食べ物、空気の状態など、全身で感じて吸収するのが好きです。

私が制作するとき大切にしていることは、素直な心で自由に楽しむこと。心も身体も軽やかにして、描いています。少し旅するのに似ていますね。

では、描いてみましょう。今日の気分で好きな色を選び、スタートです。ぱっと広がるブルー、ドキッとさせる青さです。いつか行った海を思い出します。隣にターコイズブルーを置いてみると、私の耳の中に波音が聞こえてきて、あっという間に海へ旅してしまいます。冷たい水、海からの風、さらさらの砂、記憶にある自然との対話が始まり、派手なパラソルの花、耳がぶーんとなる水の中、息を詰めて見た泳ぐ魚…。現実には色を選び、描いているのですが、私の頭の中は記憶にある自然を旅しています。そうして写し取った世界は理想郷の海ではなく、私の記憶にあるいくつものリアルな海となります。

たまたま海の話をしたましたが、雨や花、食べ物など選ぶ色によって心が旅する場所はさまざまです。過ぎ去った体験をもう一度見直し、大切なものを選んでい

くことで自分の自然観が確立していき、現在と過去が重なっていくことがおもしろくてやめられないのです。そうした行為は私にとってはとても必要で、浄化してくれているようです。

私はよく空間に大きく広げる作品をつくります。制作した小さなパーツを使って展示会場で仕上げます。ある程度のことは決めていますが、現場でラストの大制作が始まります。長い時間とパワーを使った小さな作品達、緊張と集中、時間差のない全力の世界です。そうして仕上がった作品を眺める瞬間がたまらないほどの快感なのです。見渡して、包まれて、納得して、等身大の自分を知ります。切り取り、つなげた世界は、私がいとおしくてつなぎとめておきたい日常の大切なものばかり。一つ一つは決して特別ではないのですが、たくさんになることで怖いほどのパワーとなるのです。今の私はどうだろうか？ きちんと生きているのだろうか？ それを確かめたいという好奇心で私の作品はできているのだと思います。

人は仕事であったり、母であったり、その人の立つ位置で自分を振り返りながら生きていると思います。私はたまたま美術だったのです。かけ離れた世界ではなく、共感できる作品になっていると信じています。

## CONTENTS

2013 Vol.58-4 No.420

**特集** ほんとうにすごい造形教育  
第4回 感じる力、伝える力

- ▶感性と批評  
武蔵野美術大学 教授 三澤 一実……………2
- ▶美術鑑賞で“感じる”“考える”“伝える”力を育む  
広島大学大学院 准教授 中村 和世……………4
- ▶美術における心の教育  
富山県砺波市立庄川中学校 岡部 俊彦……………6
- ▶図工の時間に感じていること  
東京都杉並区立方南小学校 室 惠理子……………8

**私の失敗談**

- 失敗は少ない方だと思うのですが…  
東京都町田市立町田第三中学校 校長 永関 和雄……………10

これだけは知っておきたい **刃物編**……………11

**教材研究 小学校**

- つたえてきてつながって「へんてこみちのぼうけん」  
埼玉県川口市立柳崎小学校 宮本 優子……………12

**教材研究 中学校**

- 篆刻 ～見て楽しむ印鑑をつくらう～  
熊本県菊池市立泗水中学校 久保 敦嗣……………14

**図工室・美術室**

- 鑑賞が「楽しい」と言える子どもに！  
秋田県湯沢市立湯沢西小学校 藤原 和彦……………16
- 美術と地域を愛するきっかけをつくる  
愛知県豊田市立若園中学校 鈴木 早紀恵……………16

**今月の見つけたよ！**

- 「春のうたがきこえてくるよ」……………17

**地域のアート**

- 「光をデザインしてみよう～ランプシェード～」……………17

特集

# ほんとうにすごい造形教育



## 第4回

# 感じる力、 伝える力

太古の昔、人は洞窟に絵を描き、仲間とのコミュニケーションを図った。  
そして、現在、大都市では、建物も近未来を象徴するかのような造形に変わり、  
ショーウィンドウを埋める色彩も流行や季節の変化を感じさせる。  
「かわいい」をキーワードとする視覚文化もすっかりと定着してきた。  
造形活動に込められた思いは、時代や文化が違ってても万人を共感させ、  
豊かな生活を求めてきた歴史は今も昔も変わることがない。  
人はどのような形に惹かれ、どのような色を好むのか、  
幼い時から造形教育で培われてきた美的感性や、形や色への感覚は、  
空気と同様に普段意識されることがない。  
しかし、生きていく上で、なくてはならない力として我々の中に深く存在する。

## 子どもの感性

子ども時代にあつた能力が大人になるにつれ薄れていくことはよくある。例えば、直感力などはどうだろうか。美術館に勤務していた時、子どもが抽象的な作品の意味を見事に言い当てる場面にも出会った。そのような直感的に物事を見通す力は歳を重ねるに従い、徐々に失われていくような気がする。学習によって身につけた知識が邪魔をして素直に作品を見ることができなくなってくる。だが、この変化が大人になるといふことなのだろう。

美術は自己と向き合い、深く考える教科である。それまでに身につけた知や、感覚を総動員して考え、自分自身に責任をもって判断を下し、表現していく教科である。新たな価値や作品を生み出すというものはそういうことであろう。情動的に感覚の赴くままの表現も、またオートマチックによる偶然性によってできた表現も、美術表現に昇華させていくには、表現する前に、または後付けで、作品が意味する意味を見出していか

## 感性と批評

み さ わ か ず み  
三 澤 一 実

武蔵野美術大学 教授



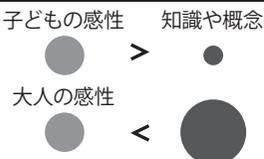
なければならぬ（「意味がないことが意味だ」も含め）。さらに芸術表現に至っては意図的、継続的、連続的な表現行為となり、子どもの表現における偶然性とは明らかに異なってくる。

る。

このような大人の芸術はともかく、子どもにおいても創造行為とは、つくったり見たりすることを通して確かめたり、発見したり、まさに実験を行っているようなもので、必ず考えるという行為は付随するものである。

さて、話を直感に戻すと、直感力は大人になるに従い失われていくのだろうか。実は大人になっても子どもの時の直感力はそのまま残っているのではないだろうか。子ども時代、感性に頼って生きてきた私たちは、成長するにつれ知識を得て、ある時から物事の判断の優位性がそれまでの感覚に基づく判断から、知識や経験を基盤にした知覚の判断へと移っていったと考えられないだろうか。私たちは子ども時代の感性を忘れてい

## 判断の優位性



## 理想的な状況



だけなのかもしれない。そのように考えると、小学校では「感性を働かせながら」、中学校では「感性を豊かにし」と、学習指導要領に示された教科目標の感性に関わる文言が変わるのも理解できよう。すなわち、図画工作・美術の役割として、子ども時代に輝いていた感性を維持しつつ、さらにふくらませて、いかに大人の感性（直観）につないでいくかが重要な仕事の一つとして問われている。

## 教師の役割

「感性を育てる」という学びは、実はそうたやすくはない。感性は個々の人間に備わった個人的なものである。一方、知識はすべての人間が共有できる概念だ。美術教育は感性に基づく個人的な体験を充実させ、他の人々との交流によって自分自身の感じ方を確認し、共有できる美や価値を発見したり、自分らしさを発見したりしていく活動といえる。このことは教師と生徒との関係を考える上で重要な視点となってくる。すなわち、両者間においては価値観の優劣はつかず、感じることや美的な

価値観においては全く平等であるという原則が存在するのである。

ところが学校ではなかなかそうはいかない。教師は学校という教育システムの中で子どもたちをいかに社会に適合させていくか、そのための知識や態度を指導し育てるのが仕事である。特に中学校の美術科教員は他の教科に比べ内面性を扱う教科の特性として、個（内面性）と社会（公共性）という人間の内外との、相反するとも言える指導を一人の教員が行うジレンマを抱えていないだろうか。

価値観の平等を考えると、授業では子どもと対等なパワーバランスを保った上で、単に技術指導に終始せず、価値観をぶつかり合わせ、戦わせる必要がある。つまり、美術の時間は、教師自身が子どもと対等になれる資質や能力が求められ、そのために、子どもたちのみずみずしい感性に太刀打ち（対峙）できる大人の感性を身につけていなければならないのである。

## 造形批評の力

私は芸術理解は体験を通し

てでしか身につかないと考えている。すなわち、芸術表現も芸術鑑賞も、いたって個人的な体験であり、その積み重ねが芸術の理解につながっている。したがって、学校教育では子どもの頃の本能的な感性を、学習によつて身につけた概念で覆い隠さないように、いかに体験を積み重ねていくか。そしてさらに、自らの芸術体験を言語化したり意識化したりしながら、子どもの感性から大人の感性に変容させていくか。すなわち成長という不断の生に合わせて感性の育み方を変化させていかなければならないのである。いわゆる発達過程における学びの連続性である。感性の変容は恐れるものではなく、個人の一生に必要な変化として捉え育む必要がある。例えば、大人の作品鑑賞では必要に応じて与えられた知識が作品のイメージを広げることに重要な働きをする。このときに知識と感性は補完係にあり、相互に強化し合う。私たちは成長とともに、身につけた概念や人生経験を通して得た知をもとに、さらに作品を豊かに見ようとしているのである。

そのような大人の感性を育むためには、作品を構成している形や色彩など、その造形要素がもたらすイメージを理解することも重要である。私たちは造形的な形や色がつまみ性格やイメージをもとに、造形的な批評力を発揮し、作品鑑賞を深めているのである。いわゆる学習指導要領に示された「共通事項」である。子どもの無邪気な感性は、体験を積み重ねて行く中で徐々に造形言語を意図的に扱えるようになり、読み解いたりできるようになってくる。その蓄積が大人になったときの芸術理解につながっていくのである。

## 美術というメディア

昨年10月末に学生と「旅するムサビ」で上海に行ってきた。ちょうど尖閣問題に端を発した反日デモの1か月後である。幸い反日的な場面には出遭わず、むしろ温かい目で我々一行を招いてくれた。さて、上海の中学生と武蔵野美術大学の学生作品を使って対話による鑑賞をした時のことである。当初は通訳の難しさも手伝ってぎこちない雰

囲気だったが、2作品目、そして自由鑑賞になった時、学生と生徒たちはスケッチブックに図を描いたり、筆談をしたり、互いに理解しようとして積極的にコミュニケーションを取るようになり変わっていった。その中で、ある学生のスケッチブックをのぞき込むと、上海の生徒が学生のスケッチブックに上海の生徒が「穿越時空」と書いていた。学生は思わず、「うんうん、そうそう」と満面の笑みを浮かべ、感動していた。まさに作品のイメージを言い当てた文字であった。

もしその場面に作品がなかったらどうだろう。彼らの間に作品が介在していなかったら、学生は自分が伝えたいことを十分に伝えられただろうか。作品がもつ造形のイメージが、中国と日本の文化の壁を越えて通じ合ったこの場面は、まさに造形的な批評能力が相互に発揮され、作品のイメージが共有された瞬間であった。このように、造形は異なるもの同士をつなぐメディアとしての働きをもっている。だからこそこれからのグローバル化に対応した学びになるのである。

## はじめに

約20年前、アメリカの大学で鑑賞教育について学ぶ機会を得て以来、アメリカと日本を往復しつつ、学校の先生方とともに研究し、公教育としての図画工作・美術科で何をなすべきなのか、実際には何ができるのかを考え、活動してきました。アメリカの教育にじかに触れることで気付かされるのは、アメリカの美術教師たちは、読み書き計算と同じように美術は公教育のコアであるリテラシーの教科であるという意識が高いことです。現在、アメリカでは、日本の学習指導要領のような役割をもった「主米視覚芸術スタンダード」が改訂されています。スタンダードでは、音楽やダンスなどの芸術教科に共通して、「芸術的リテラシーを備えた市民」の育成が目指されています。芸術的リテラシーとは、「芸術に真正に参加するために必要とされる知識と理解である」と定義され、就園前から高等学校までの各段階で子どもたちが到達すべき内容が整理されています。

# 美術鑑賞で “感じる”“考える” “伝える”力を育む

なかむら かずよ  
広島大学大学院 准教授 中村 和世

私は、日本においても子ども  
の人間性を豊かにする美術のリ  
テラシー教育を推進していくこ  
とが必要だと考えています。

## 美的リテラシーとは何か

美術は思想や感情を交信する  
言語であり、それを通して人格  
形成を行う図画工作・美術科は

公教育で必要不可欠な位置づけにあるという考え方は、アメリカでは古く、ジョン・デューイの「民主主義と教育」(1916年)に示されています。近年では、これを一つの根拠においたDBAE(ディシプリンに依拠した美術教育)と呼ばれる美術教育改革運動が行われています。この運動は、日本の図画工作・美術科にも影響を及ぼし、今日における鑑賞学習の拡大をもたらしました。

デューイからDBAEを経て今日のアメリカの美術教育に受け継がれている美術のリテラシー教育は、単なる専門的な知識・技能の蓄積ではなく、教室での学びが子どもの実生活において、いかに効果的に生きて働くかを問題としています。そこでは、美術作品との対話を通して生き方にかかわる行為の美醜や善悪などについて気付いたり考えたり判断したりすることで、子どもの人間性を育てる「美的リテラシー」の教育が目指されています。

美的リテラシーを育む具体的な指導アプローチとして、アメ

リカで普及している方法があります。Aesthetic Perception Approach(美的感性アプローチ)と呼ばれ、一言で言えば、以下の5つの特性に着眼しながら、見る側が自らの視点で作家の制作における思考を想像し、自らの世界を深め、他者と交流する活動を通して、作品との対話を活性化していく方法です。

- ① 題材的特性(人、花、動物など描かれているものの特性)
- ② 感覚的特性(形、色、線、質感など、造形要素の特性)
- ③ 形態的特性(対比、バランス、繰り返し、統一などの構成上の特性)
- ④ 表現的特性(楽しい、不思議な、恐ろしいなど作品全体から受ける感じの特性)
- ⑤ 技術的特性(用いられている材料や技術の特性)

美的感性アプローチを用いたより高度な学習では、流派、時代、文化など作品が生み出された歴史的背景を考えたり、基準を明確にして作品の価値を判断したりすることで、作品のみでなく、生き方にかかわる価値に対する批評力につながるようなリテラシーを培っていくことが目指されます。

## 美的リテラシーの教育を実現するために

— 広島県立美術館の鑑賞学習開発プロジェクト —

小学生に美的リテラシーを育むことを一つのねらいとして、5年前から広島県の公立小学校の先生方と広島県立美術館の学芸員さんと組織的に子どもたちの美術鑑賞学習の開発を進めています。これまで広島県立美術館の所蔵作品を対象としたアートカード教材、及びパワーポイント教材を用いて、小学校低学年から高学年までの発達段階を踏まえた鑑賞題材を実践研究を通して作成しました。プロジェクトでは、「感じる」「考える」「伝える」をキーワードとして左記を鑑賞指導の主要なポイントとしています。

感じる	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの感じ方・考え方を認め、励ます。</li> <li>子ども自身のよさや美しさの基準を広げ、深める。</li> </ul>
考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>子ども自身による作品からの発見を促す。</li> <li>作品の造形要素・構成などに根拠を持たせる。</li> </ul>
伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達との交流を活性化させる。</li> </ul>

ここでは、プロジェクトの中で実際に行われた授業から小学校6年生の児童の例を紹介します。全5時間で計画された学習指導は、表現と鑑賞の相関を図り、「アートカードを用いた鑑賞」鑑賞を踏まえた表現「アートカードの再鑑賞」という構成で進められています。最初に、約20枚のアートカードから、児童自身が「喜び」を感じるカードを選び、選んだ理由をイメージ、形、色の特性に着目しながら友達と交流し、次に、「喜び」をテーマとする絵画作品を制作し、最後に、アートカードの再鑑賞を行っています。

児童Aと児童Bは、ともにパウル・クレーの「ある音楽家のための楽譜」を選んでいますが、異なる視点から造形上の特性を見つけ、異なる内容を感じ取っています。

### 児童A

「イメージ」音符みたいな線がある。リズムにのって進んでいけそうなきがした。

「形」私は、この絵を見て楽譜みたいたと思った。この絵からすごい軽快な音があふれていると思った。

「色」私は、太陽の光がさしているような色に希望を感じた。一列ごとの色が違っている。元気だなあと思った。

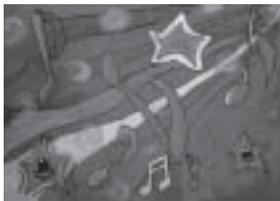
### 児童B

「イメージ」音楽家たちが、この楽譜をがんばって、がんばって読んでいく希望が伝わった。

「形」楽譜みたいになっていてかわい。右上の八分音符みたいなのが本物の楽譜みたい。

「色」淡いオレンジや紫で下地をぬっているの、上の黒が引き立っている。

そして、児童Aと児童Bは、同じ作品を一つの手掛かりとし



児童B「弾ける音楽の世界」



児童A「空の町」



パウル・クレー  
「ある音楽家のための楽譜」

ながらも、自らの喜びのイメージを追求し、異なる表現方法で作品を生み出しています。

一人の児童は、「絵が同じでも違うイメージの人がいて、人間って人格がちがうんだなと思った。」という感想を残しています。ここに示されるように、図画工作・美術科で育てるリテラシーとは、児童一人一人の世界を創り出し、他者の世界への気付きを増やし、かわりを深めるために生きて働くリテラシーであると考えています。

### 今後に向けて

広島県で行っている私たちのプロジェクトは地域レベルの小規模なものです。まずは、始めの第一歩を踏み出し、そして継続し、美的リテラシーの教育普及に向けて実績を積んでいくことが大事だと考えています。「学力」は、国語と数学に限られるのではなく、子どもの人間性を豊かにする美術のリテラシーも含まれていることを、美術教育者である私たち一人一人が自覚し、私たちから発信していく必要があると思います。

## 芸術のもつ力

震災に関して私が特に感銘を受けた話がある。それは、津波に遭遇した子どもたちの記憶やトラウマに対して腫れ物に触るように接することはやめ、逃げるのではなく、自分で乗り越えるべきものとして積極的に関わっている実践である。津波に関する民話を劇にしたり、海をテーマとしたソーラン節をもとにみんなで踊ったりして、自分たちの心の闇を解放していく姿に、これからの教育や日本人の在り方に対する方向性を感じた。

「表現には自分の心を癒す力がある。自分の心の傷をオブラートに包むのではなく、積極的に表現することで、自分を取り戻せる。自分を思い切り出していることが癒しとなる。表現することで、自分を昇華できるのではないか。」と感じた。

## 心の教育としての美術

美術は心と密接に結びついた教科であり、自由な表現をして心を解放させるなど、コミュニケーションのツールとなる力が

# 美術における心の教育

—イメージの世界を体験し、表現する活動を通して—

富山県砺波市立庄川中学校 としまし 岡部 俊彦 おかべとしひこ

実践する毎日である。その実現のために私は、人間のもつイメージする力を大切にしている。

## イメージの力を利用する

人間の創造の源はイメージである。人間はイメージすることで過去にも未来にも行ける。場所を移動できる。人やものとの交感できる。夢や理想を描ける。空想の世界へ旅立つことができる。形がないものを形があるものとして概念化することができる。人間はイメージする力によって、文明を創造した。そして、イメージトレーニングという言葉があるように、イメージする力が強ければ強いほど、そのイメージは実現するのである。したがって、大切なのは、イメージの主体である自分をより深く見詰め、イメージをより広く、深くできる体験を積み、イメージをリアリティあるものとして想像できる力をつけることだと考える。

## イメージを磨くワークについて

美術の授業では、常に「初め

にイメージありき」で、発想や構想の過程を大切にしたい授業展開を心がけている。そのため、近年、私は授業の展開の中で、生徒が「自分を見つめる」「感覚や感性を磨く」「イメージを拡大・深化する」「イメージを形や色にする」ことを大切にさまざまなワークを行っている。

その中の一つ「イメージワーク」とは、五感や身体、イメージを窓口として心を探り、自分や身の回りの世界を見直したり、友達と協力して自分自身の内面を見つめたりする活動である。

また「スケッチワーク」は、その体験を自分自身の感覚や感性を生かして、さまざまな描画材料を使い、形や色としてまとめる活動である。この二つは補完し合い、スケッチワークで形や色にすることでイメージが深まったり、スケッチワークの鑑賞を通してさまざまな感覚や感性に触れ、イメージを広げたりすることもできる。

※この二つのワークは美術、演劇、舞踊、エンカウンターなどのメソッドをもとに、私が自分流に体系化し、実践しているものである。

## 感じる力を育てる イメージワーク

イメージワークは生徒の心が多くの思いやイメージに満ちあふれ、表現せずにはいられない状況をつくり出すためにも行う。対象が自分にとつて強くなりアリティをもち、自分の分身となるほどの思い入れをもって表現できるからである。現在、イメージワークは左のように三つの方向へ展開している。

### ①感覚や感性を磨くためのワーク

(自分の身体、身近なものや人に対して敏感になることを目指す)

- ・植物になって成長を体験する。
- ・音を聴いたり、オノマトペを形や色にしたりする。
- ・ものを触ったり、手に刺激を与えたりする。
- ・自分や、友達と二人で目を閉じて歩く。
- ・友達と二人で行い、相手が自分の身体を軽くやさしく叩く、空気の流れをつくるなどを通して、その友達の存在を体全体で感じる。

### ②自分を見つめるためのワーク

(自分を知り、自信と夢をもつことを目指す)

- ・自分の目標へ向かって努力している自分や、それをなし遂げた自分の姿をイメージする。
- ・学校行事などを追体験する。
- ・自分の大切なものや好きなもの、特徴をチェックしたり、X年後の自分の姿をイメージしたりする。

### ③イメージを拡大・深化するためのワーク

(イメージの世界をより広く、深く旅することを目指す)

- ・自分や友達の身体から発生するエネルギーを感じる。
- ・冬の山小屋での生活や水になって宇宙を旅する仮想体験を行う。



植物になるイメージワーク

## 伝える力を育てる スケッチワーク

生徒は、自分のイメージや考えなどが十分満足のいく形で表現されることや自分の表現した思いがメッセージとして第三者に伝わることで喜びを感じる。そのために、相手に伝わるように形や色、構成、描画材料、描くもの、技法などの視覚言語（造形言語）を使いこなすことが大切になる。表現するスキルとしての美術の技術を磨き、相手に伝える力を養うためにもスケッチワークを行うのである。

人に伝えるためには、伝わるように表現する必要がある。それは、この形や色を使うことで相手がどう感じるかを考える必要がある。それは相手に対しての思いやりである。イメージワークでの体験をスケッチワーク



聴いた音を形にしたスケッチ

クとして表現することを積み重ねること、心が耕され、イメージや思いにあふれ、表現したいという欲求が増す。表現が心の深い部分につながり、その人らしさ、その人のよさ、その人の個性が出やすくなる。そして、相手に伝えたいという欲求が増し、そのために造形言語や技法を工夫するようになる。考える。また、伝えることを通して相手を理解したり、認めたり、相手に対して思いやりをもって接する意識を高めることにつながる。と信じている。

## 生きる力を育てるワーク

「イメージワークで感じたことをスケッチワークとして形や色にし、鑑賞し合う」こと、それは、自分なりの気持ちや感じ方を思い切り表現し、それが理解されることである。その過程を通して、生徒は自分の殻を破り、自信をもって表現したいという意識を育てる。そして、生徒の心を耕し、自らをアピールする力や生きる力に結びつき、困難に立ち向かうエネルギーが育まれると信じている。

## はじめに

実家に帰省した際に、自分が子どもの頃に描いた絵が出てきた。3歳くらいから小学生のときに描いた絵だ。私は幼児期の作品の、まるでさつきパスを塗ったばかりのような画面を見て、突然タイムスリップして小さい頃の自分に出会ってしまったような不思議な感覚におそわれた。「私はこのとき何を感じて生きていて、何を伝えたかったのかな…」絵のタイトルにははつきりと「わたしはおおきくなったらばれり・なになります」と書いてあった。

私は小学校の教員になる前は、(バレリーナでもなく)一般企業に就職し、営業の仕事をしていた。数値に追われ、深夜まで働き詰めの毎日で、何かに感動することや、自分のアイ



# 図工の時間に感じていること

東京都杉並区立方南小学校 室恵理子

デンティティを發揮して何かを伝えようということもあまりなかったように思う。

今、図工の授業の中で日々、子どもとかわり、彼らが自己を形成しながら生きる姿を目の前にして、自分自身が子どもたちから教えられることがたくさんある。いろいろな「もの」や「こと」を体全体で受け止めて表現している子どもたちが、私の衰

えていた大事な感覚を少しずつ呼び覚まし、「そうか、人生って、もっとわくわく楽しいものだよな」と気づかせてくれている。

## 図工の時間から感じる力

毎日の授業には、教師が設定する身につけたい力を目標に据えた題材のねらいがあつて、ある程度、活動の様子を想定はするのだが、子どもたちはそれを優に乗り越えていく。そこには、身体感覚を働かせながら材料や友達や場所や偶然の出来事など、あらゆる刺激を体全体で感じ、受け止めている子どもたちの姿がある。

1学期の終わりに、校庭の砂場で1年生と授業をした。子どもたちは裸足になって歓声をあげながら、どんどん砂にまみれていった。「きもちいい」「あ〜」「さらさら」「乾いているところとぬれているところの色がちがうね!」「あつたかい!」「熱い!」「ふわふわする」「きもちいい」…砂の温度、感触、柔らかさや硬さ、色など砂場の砂を自分の体で実感し確かめている。砂の中に入れた足が



あつたかいと言った男の子は自分の足にどんどん砂をかけていき、とうとうお尻まで埋めてしまった。穴を掘り進めると掻き出した砂で山ができ、そこから「いいこと考えた!」がはじまつた子もいた。「富士山!」「これ洞窟だったらすごいね」「落とし穴!」「山のプール」「つなげ

て川にするんだ」水をかけるとまた様子が変わっていき、その変化を感じつつ、やりたいことを思いついた子どもたちはどんどん活動しはじめた。「もつと水があるよ」「もつと高くしたい」「もつとすごいよ」「もつと……」子どもの声の中から「もつと」がたくさん聞こえてきてうれしくなった。自分が体感してつかんだ感覚が作り出したい意欲へとつながっていった。

2年生の立体の授業では、学校の近くにある神田川沿いを散歩に出かけた。そこで自分が見つけたものを紙粘土でつくり、家族や友達に教えてあげようという活動だ。いつも通っている見慣れた道にも新たな発見がある。子どもたちはただ目で見ただけでなく、カリンの木の下に落ちていた実を見つけて匂いを嗅いだり、神社の境内で見つけた巨大なキノコの傘の裏側をそっと触ったり、赤とんぼをつかまえて透きとおった翅の薄さを指先で感じていた。人は初めてのものに出会うと、まず触って確かめたくなるのだとどこかで聞いたことがあるが、子ども

たちはそのものの実態を自分の感じ方で体感して知ろうとしているようだった。

学校に帰ってから、自分が見つけたいいものを今日いっしょに散歩に行けなかった人に伝えるために形に表す。ある子は、ネコジャラシを触ったときのふわふわを表したくて紙粘土を細かくちぎってくつつけた。散歩の途中で偶然にも真っ白い大きな鳥がやってきて「あれはコサギだよ」と担任の先生が教えてくれたから、魚を食べようと首をもたげているコサギをつけた子がいた。川で泳ぐ鯉の群れを見つけた子は、家族に伝えたかったから、鯉の親子が口をパクパクしている様子をイメージ



してつくった。自分が感じたことを誰かに伝えたいという思いが、つくる意欲へつながった。

### 図工の時間で伝える力

図工の時間には、子どもが材料の魅力に心をときめかせたり、材料そのものを体感したり、活動の中の様々な行為からひらめいたりして、自分だけの思いをもち、自分自身を表現することができると。そして、ものやことや人とかかわりながら、自分の価値観やものの見方など世界を広げていくことができる。そのためには大人のもつ具体的なイメージをあてはめたり押しついたりするのはなく、主体的に自分の思いを表現できることが保証されていること、自分の好きなこと・表したいことが自由に表現できるテーマや題材であることが大切である。そして、子どもたちが体全体で受け止め、思いを広げて表現しやすくなるような設定や、十分に感じることができ環境をどのようにつくっていくかを私たちは日々考えていきたい。例えば、裸足になって全身で砂を感じるこ



ができるような導入の声かけや、自分が散歩で見つけたことを人に伝えたくなる題材設定の工夫などによって、子どもたちは豊かな表現を伝えてくれる。

自分の体験したことや感じたことから自分の表したい思いをもち、表すこと。そんな主体的な姿が自分らしく生きることにつながるのではないだろうか。そしてそのような時間を常に設定することができるのは、図画工作科という教科がなせる技であると思う。

自分らしく生きるとは、大人になった自分にとっても永遠のテーマである。「バレリーナになれなくても、私は今、自分らしく生きていますよ」と5歳の私に言っただけだ。



# 私の失敗談

失敗は少ない方だと思うのですが…

私は長いこと美術教育に関わっていますが、実際に中学生を教えていたのは新採教員としてスタートした昭和51年から平成元年までの13年間でした。

初任校は、当時校内暴力の嵐が吹き荒れていましたが、生徒たちの多くは美術の授業が好きで、他の授業を抜け出して美術室に紛れ込む生徒もいました。

今回「私の失敗談」というテーマをいただき、思い出してみましたが、25年前前のことですし、だいたい失敗したことはすぐに忘れる得な性分でもあるので、この原稿を書き始めるまでにずいぶんと時間がかかりました。いろいろなエピソードを思い出しながら率直に感じたことは、「案外失敗が少なかったな」ということです。この感じ方自体が「太平楽」な性格の表れなのでしょう。

最初の学校での失敗談は、学校に泊まり込みでテスト問題を作ったにもかかわらず、ファックス（当時印刷機にかける原稿を製版する機械をそう呼んでいた）の故障のため、写真を何枚も入れて、凝って作った問題が印刷できなかったことです。急ぎよ白い八つ切り画用紙を配り、アドリブで期末考査をすることになった冷や汗ものの大失敗でした。

何年生のテストだったのか記憶が定かではありませんが、その時の試験は、生

徒一人一人に八つ切り画用紙を1枚配り、放送で出題するという何とも泥縄の期末考査になってしまいました。放送の内容を思い出しながらテストを再現してみるとこのようになりません。

「これから美術のテストを始めます。まず最初に画用紙の左下におよそ1cmの幅でクラス、出席番号、氏名を1行で横書きしなさい。」次に自分の左手、または右手で鶏の卵を一つ持っている絵を画用紙の中央にバランスを考え、鉛筆で描きなさい。「卵は平均的な大きさで白いものを想像して描き、卵が割れない程度にしつかりと持っている様子を表現しなさい。」

このようにして何とか終わったものの、発表してあった試験範囲を真面目に勉強してきた生徒からは当然のことながらブーイングでした。

## 教師としての自信とうぬぼれ

「アドリブ期末考査」のようにわかりやすい失敗談は、後になれば笑い話ですが、もっと本質的な失敗は、自分の授業に自信が出てきた頃にあったと思っています。外から見ると美術の授業らしからぬ統制のとれた時間で、生徒は効率よく作品を制作している中に大きな失敗が隠れていました。

私にとつては2校目の学校で教員6年目のことです。ちょうど5年目となった前の年、私は東京都の教員研究生として1年間、都立教育研究所美術研究室に籍を置き、「中学校美術における形成的評価」をテーマとした研究をする機会に恵まれました。ベンジャミン・ブルームや梶田毅一氏（この頃梶田氏がまだ30代の同世代だとは知りませんでした）らの評論に共鳴し、主として生徒の自己評価を手掛かりとした形成的評価の理論と授業改善の手法を試行しながら開発していました。

ちよつと自信をつけた頭でつかちの「若僧美術教師」だったのです。

## 教師の思いと能率を 追い求めた時代

制作過程の各プロセスで具体的な評価の視点を示し、意図的に自己評価する機会を設定したことによって授業の様子は一変しました。生徒たちはおしゃべりもせず、制作に取り組むようになりました。特に授業の最後に毎回行う自己評価では、その日の学習を振り返る以上に次の時間の制作見通しについて具体的に書かせるようにしたことで、次の時間までにそろえるものや準備する資料が明確になりました。

# これだけは 知っておきたい

## 刃物編

わが国の刃物は世界中のいろいろな工芸で使われています。その素晴らしさを改めて味わいましょう。

### ○日本の刃物

身近にノミやカンナ、彫刻刀や包丁がありますか？ よく見ると、先端部分が白く輝いていて、その周りが黒ずんだ鉄でできている刃物はわが国の鍛冶屋が開発しました。

### ○鋼と地金

白く輝いている部分が鋼で、鋼は先端にちょっとついているだけです。周りはすべて地金(やわらかい鉄)でできています。ものを切るときは鋼だけが鋭ければよいのです。地金は鋼を支えているだけですから、ちょっと研げば鋼は元通りに鋭くなります。すべてが鋼の材料では硬すぎてすぐ折れたり、研ぎ直すには全部の硬い鉄を下すことになります。さらに鋭さが復元できなくなってしまいます。

### ○研ぎ

刃物は錆びます。手入れが必要です。砥石としいしを使い、定期的に研ぎ直すことをすすめます。

ものづくりを支える刃物を知ることにはわが国の文化理解につながります。

東京都町田市立町田第三中学校 校長

なが せき かず お  
永関 和雄

今までは10時間かけていた題材が6時間くらいで終わるようになり、作品の出来映えも一様によくなったのです。このように「見よいことづくめで、教師としての指導力が高まったような気がしていたことが、後で思うと大きな失敗でした。その失敗に気づかせてくれたのも生徒の自己評価表でした。当時の自己評価は中心化傾向を少なくするために4段階を原則に作っていました。最後の評価項目は毎回「今日の授業は楽しかったですか」にして、その日の楽しさを「二」「三」した顔、にっこりした顔、寂しそうな顔、泣き顔の四つの顔から一つを選ぶようにしていました。

「二」顔「三」顔「四」顔「泣き顔」なども混じっていました。しかし、目を追うごとに大部分が「にっこりした顔」ばかりになっていったのです。きつとそこそこ楽しいけど、心からの達成感や喜びは感じられなくなっていたのでしよう。生徒が決める活動へ

生徒たちの作品と自己評価表をじっくりと眺め、生徒があまり楽しいと感じなくなった理由を考えました。全体に完成度は高まり、生徒にとつて達成感はあつたはずですが、しかし、よく見ると生徒作品がどれも似ていることに気づきました。その理由として考えたのは、生徒が自分の表現したいことやその方法を自分で決める以前に、私が評価の観点を示すことによつて、知らず知らずに私のイメージしている活動に生徒を誘導していたのではないかということです。

もちろん私が立てた指導計画ですから学習の方向性を示すことは当然ですが、その題材で何を表現したいか、どうしたら自分の思いが表せるかが重要なねらいで、そのための活動としてただ能率よく作品を制作しただけでは本当のねらいは実現できていないのです。教師によつて示唆され、期待された活動を理解し、形や色に表現する能力が美術の学習に求められる本来の力ではありません。

「授業」「題材」といった枠の中で、生徒一人一人が感じ、ひらめき、考え、自分で決めて表現する力を高めることができるような機会と時間を提供し、支援することが教師の指導です。このように生徒が形や色を自分で感じ、表現を自分で決める授業だからこそ「二」「三」顔「マーク」や「泣き顔」マークが入り交じり、生き生きとした学びが成立するのでしよう。

システムチックな自己評価表を使った授業は1年間でやめ、生徒の笑顔が美術室に戻りました。

# つたえて きいて つながって 「へんてこみちの ぼうけん」

埼玉県川口市立柳崎小学校 みやもと ゆうこ 宮本 優子

## はじめに

今年出会った子どもたちは元気あふれる笑顔いっぱいの子。好奇心旺盛で何にでもやる気をもって取り組む子どもたちは、まるでスポンジのようにたくさんのことを吸収していく。そんな低学年の時期だからこそ、思い切り体全体を使って描くことを楽しみ、色を楽しむ体験をさせてあげたいと思い、今回の題材を取り上げた。

なお、本題材は一昨年、第52回埼玉県造形教育研究大会Iで紹介されていた「おしゃべりアート」の活動を、児童の実態に合わせてアレンジしたものである。

## 題材について

「へんてこみちのぼうけん」(1年生)は、クレヨンや共同絵の具、カラーペンなどの描画材を用いて、大きな紙に描かれた線(へんてこみち)からイメージした世界を描いていく題材である。活動させるにあたって、大切にすることは次の二つである。一つ目は、クレヨンの使い方何度も試すことだ。1年生の1学期ということもあり、クレヨンで絵を描くことに慣れていない子や、どうしても小さく描いてしまう子が多かった。そこで、本題材に入る前に「クレヨン名人になろう!」という投げかけで大きな紙にさまざまな線を描くクレヨン遊びを行い、色の重なりを楽しんだり、体全体を使っていろいろな線の描き方を試したりすることを重視した。

二つ目は、イメージを広げ、自分の思いを友達に伝えていくということだ。はじめは個人での活動、その次にペア同士、その次にグループの仲間といったように、段階を踏み、交流しながら表現していく。活動の途中でペアの友達に自分の絵の説明をしたり、友達の絵の説明を聞いたりする活動を取り入れることで、共感される喜び、一緒につくりあげる楽しさを味わえるよう工夫した。

用紙に描かれている「へんてこみち」は、用紙を輪のようにして並べると一本道でつながっている。表現活動のあとに、一斉にみんな並べてみると「おお!」と歓声のあがる一つの作品になるところが盛り上がりとなる。

## 活動の流れ

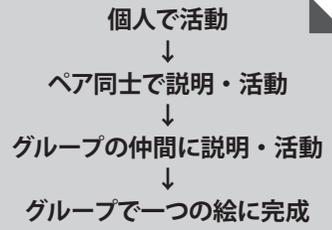
### ①クレヨン名人になろう!

貼り合わせた大きな模造紙に思い切り線を描かせる。色や形に着目させ、「素敵だな」と思う色の組み合わせ、「おもしろいな」と思う線を見つけさせる。



### ②「へんてこみち」で ぼうけんしよう!

配られた紙に描いてある線からイメージをふくらませて絵に表す。先に描いてある線は、輪にして並べるとつながるようになっていく。ペアやグループごとにお話しながらストーリー



リーを考える。個人での活動とペアでの活動の時間は10分程度の短い時間で行った。とどりの子たちはどうなっているのだろうと子どもたちが興味を示してきたからだ。グループの活動になってから、発想がかなり広がってきた。ある子は、はじめ線の形から「ジェットコースターの街」を思いついた。その後、ペア同士の活動から道の中に星が現れ、グループの子から、「道に星があつて天の川みたい。夜空の中のコースターだね。」という感想が出た。その言葉にグループのみんなが「それいいね！」と賛同し、最後にそのグループのストーリーは「ジェットコースターに乗ったまま、天の川でお買い物」となった。子どもたちが、一斉に

「それいいね」と笑顔になった瞬間がとても印象的だった。

### ③ みんなの作品をつなげよう！

できた作品をみんなですつなげ合おう。「オッソッ」みんなの気持ちの一つの作品になってつながる瞬間だ。



### ④ みあつてみあつて鑑賞タイム

クラス全体で、つながつた作品をどんな世界か、どんなところがおすすめかを発表する。友達の発表を聞いて、「すごい！ほんとにきれいな花火だね」と共感したり、「ぼくもここで遊びたい」など絵の中に入り込んだりしている姿も見られた。

## 活動を終えて

この活動は、クレヨン遊びの活動も含めて3時間で行った。その間子どもたちは真剣に集中し、色を染しみ、友達と楽しそうに絵をつくり上げていた。また、一部一部の絵に目を向けると子どもたちの「やつてみたい」「遊んでみたい」「こんな世界に住みたい」などの思いがあふれ、楽しそうな場面には必ず自分や友達の姿が描かれていた。日常の体験が造形活動に生かされている子どもたちの姿を肌で感じることができたひとときだった。絵の世界に入り込むように活動するのは低学年の特性であるが、夢中になって取り組むことができる題材を発達の段階に応じて提供していく大切さを改めて感じる。今回の題材は低学年の実態に合わせて、テーマを提示してストーリーを考えさせたが、学年に応じてテーマを提示せず、線だけから何に見えるかかをイメージさせるなど発展的な方法も考えられるので、今後も教材研究を深めていきたい。

## おわりに

大きな作品をつくることは家庭ではなかなかできない。共同で何かをつくり上げること、自分と向き合い、個人で作品をつくり上げること、それぞれの必要性を感じる中で、学校だからこそ、仲間がいるからこそできる造形活動も大切にして、日々の図工の時間に取り入れていきたいと思う。



# 篆刻

## ～見て楽しむ印鑑をつくらう～

熊本県菊池市立泗水中学校 久保 敦嗣

### はじめに

職員室にいたとき、30代前半の先生から「先生見てください。これは私が中学生の時につくった篆刻です。」と作品を手渡されました。「すごい。これ先生がつくったんですね。印字面は、名前だけでデザインされていますね。」と、制作されてから15年ほど経つ、大事に保管されてきた宝物を手渡された気持ちになりました。「時間がなくて、印面だけつくったんです。」と、私を持ち手をぐるっと回しながら見ていたことに気づかれて、当時のことを話してくれました。

絵を描くのは苦手でも、彫刻は得意と感じている生徒がいます。さまざまな題材を取り入れて表現活動を経験させていくことは、自己の才能を見出し、ものづくりを好きになる生徒を育てるきっかけになると感じることも多いものです。制作することが好きになり、作品を大切にしていこうとする心情を育て、自分で制作した作品に愛着をもてるように取り組んだ実践を紹介します。

### 題材について

題材名「篆刻」見て楽しむ印鑑をつくらう」

A表現(2)ア 第2学年 11時間

開隆堂の教科書2・3年では「伝統の美に学ぶ」という題材です。石は高樓石を使っており、生徒にとっては加工しやすいものです。

石を手にした生徒は、冷たくて硬そうな石を彫

れるのかと興味を示します。印鑑に使うものの材質には、何度も使用できる強度と、愛着をもてる見た目や触感が必要だと捉えさせます。参考作品もさまざまなあるので、視覚を通してイメージが頭の中で沸くと、篆刻文字が自分の名前を新たにイメージチェンジしてくれたように思えてくるでしょう。

小篆文字と印章文字の2種類で名前をデザインするなど、書体はさまざまです。自分の文字が違いう書体で描いていくと、夢中になって自分の名前を格好よくしようとします。違う印象をもつ自分の名前を見たとき、文字の意味を確かめたくありません。そこから、親の思いや願いを知りたい心が揺れ動くのです。この題材は、徳育に通じていく題材としても期待できます。

### 授業実践(学習活動)

#### □印面

- ① 篆刻についての説明をする。参考作品を提示しながら、陰刻と陽刻の違いを理解させる。
- ② 自分の名前を篆刻文字の資料から探し出し、印面の大きさに合わせてデザインをする。
- ③ 小篆文字と印章文字の2種類でデザインさせて、自分の気に入るデザインを決定する。
- ④ 下書きをトレーシングペーパーに写し取り、油性ペンで書く。
- ⑤ 印面仕立てを紙やすりで行う。
- ⑥ トレーシングペーパーを裏返しにして写し

取る。文字が逆字になっているか確認する。

⑦ 彫りに入る。篆刻台にはさみ、下に粘土板を敷いて輪郭から彫る。陽刻と陰刻の違いを理解させ、上で彫り進めさせていく。

⑧ だいたい彫り終わったら後、試しに押しこめる。調子を見て、彫り残しや輪郭のさびの感じを修正するなど訂正彫りをする。

⑨ 訂正終了後に捺印し、印面の完成とする。

### □ 持ち手

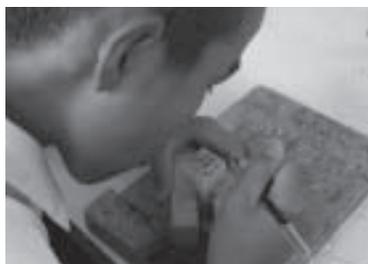
⑩ 持ち手のデザインを、正面図・左右側面図・真上からと形をとらせる。〈アイデアスケッチをして、デザインを絞り込む〉

⑪ 油性ペンで石に描き、彫刻刀・石削り用やすりを使って、形を彫っていく。

⑫ 形が整ったら、石を水につけながら紙やすりで研磨を行う。

⑬ 研磨後に、きめの細かい爪やすりで表面を磨き、つやを出す。

⑭ 完成後、鑑賞会を行い、制作者が工夫したところを聞きながら、付箋紙に感想を書いて本人に渡していく。



## 授業実践後アンケート (生徒の実態)

授業後のアンケートから、生徒の変容が見られました。今回の実践から、絵画制作よりも彫刻制作に魅力を感じる生徒が増えています。授業の工程の中に、デザインを考える場面を設定しました。「デザインを考えるのは難しい」と感じたことは、脳を働かせてつくり出す機会と出会ったと捉えています。他の人の作品を鑑賞する機会を設けることで、アイデアを生み出すきっかけを与えることができると考えました。作品が実用的になると実感しながら制作することは、制作意欲を高めるきっかけとなりました。

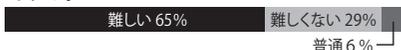
① 絵画制作と彫刻制作ではどちらが好きですか。



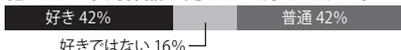
② 篆刻制作は好きですか。



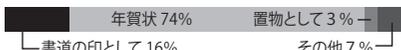
③ 篆刻の持ち手のデザインを考えるのは難しいですか。



④ 他の人の篆刻作品を見るのは好きですか。



⑤ 篆刻ができあがったら何に使いますか。



(2学年 135名実施)

## おわりに

完成した作品を、近隣の小・中学校で取り組んでいる、市の文化祭作品展に展示しました。2月に同市が開催した生涯学習フェスティバルへ出品展示することで、多くの人に見てもらおう機会を設けました。

篆刻制作を通じて、印と持ち手をつくり出す楽しさを味わえた生徒たち。今回はうまくできなかったと感じた生徒も、「次は、自分の気に入るものや、もっとよいものをつくらう。」と話していました。題材と出会い、授業制作を通して知識と技能を習得した時に、子どもたちのイメージはさらにふくらんでいくように感じます。造形教育は、生み出す力とつくり出す力を育み、作品を見ることが人々をつなぐ素晴らしい機会があり、生涯を通じて「生きる力」となると実感しています。



# 鑑賞が「楽しい」と言える子どもに!

ふじわら かずひこ  
秋田県湯沢市立湯沢西小学校 藤原 和彦

作品を見て多様な感じ方ができるのは子どもの特権である。しかし、子どもたちは高学年になるほど、すばらしい作品を目の前にすると「いいことを言わないと…」と緊張する。したがって、私は子どもたちが気楽に楽しめる鑑賞をめざして意図的・積極的に鑑賞の授業に取り組んでいる。

今回は美術館活用にもつなげたいと思い、「気分は名探偵〜虫の美術館〜」の授業を実践した。

## 1. 授業までの準備

- ① 事前に凶録を購入する。
- ② 子どもたちに凶録から見せたい作品をスキャナで読み取り、拡大印刷をする (A3判4枚)。
- ③ 子どもが作品を初めて見た時に

驚きがあるような、掲示の仕方を工夫した場の設定をする。

## 2. 本時の授業 (12作品を掲示)

凶録は、小檜山賢二写真集『象虫 マイクロプレゼンス』を使った。

- ① 「昆虫園から虫が逃げ出したから探してほしい。一匹はおしゃれな虫でもう一匹は凶暴な虫。」という設定をする。
- ② 空想でなく、形や色からイメージを広げるよう確認をする。
- ③ おしゃれだと思ふ虫には緑、凶暴だと思ふ虫には赤の付箋を貼り、それぞれの付箋に、イメージした理由を書く。
- ④ 小グループで話し



合い、全体でも交流をして、自分の感じ方を伝えるとともに、友達の感じ方との違いのおもしろさに気づく。

- ⑤ 本授業で扱った作品が美術館で展示されていることを紹介する。

3年生で行った授業だが、理科で虫の学習をした子どもたちは、理科的な見方以外にも多様な見方があることに気づき、虫の鑑賞を楽しんだ。この授業後、「本物の作品を見たい」と、美術館に実際に足を運んだ親子がいた。

# 図工室 美術室

## 美術と地域を愛する きっかけをつくる

すずき さきえ  
愛知県豊田市立若園中学校 鈴木 早紀恵

多くの美術館が中学生の入場料を無料としているにもかかわらず、美術館を利用していない生徒が意外に多い。地域の美術館・体験施設・アートスポットを生徒や保護者にもお知らせすることで、家族で美術を愛好するきっかけを提供することができないだろうか考えた。

そこで、夏休みのしおりに「夏のアート情報」というページをさはむことにした。この夏、話題の美術館情報、家族で行くとよい近場の体験施設、有名建築家による豊田市自慢の建物と橋の紹介等を掲載した。

美術館情報では、豊田市美術館の「フランス・ベーコン展」、「あいちトリエンナーレ」、鳥獣花木図屏風を展示している福島県立美術館「若冲

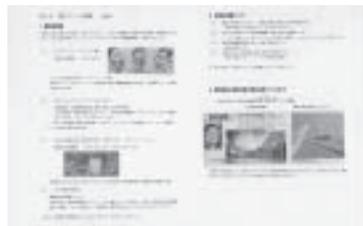
が来てくれました」、オープンしたばかりの藤城清治美術館を取り上げた。特に、豊田市美術館では、特別展以外にも、豊田の宝であるクリムトやエゴン・シーレ、高橋節郎らの作品を常時見ることができる。美術館へ行けなくても、豊田市民として知っておきたいし、ホームページやテレビ、新聞でもアートに触れることはできる。

近場の体験施設として、豊田市の伝統工芸・小原和紙の紙漉き体験ができる、豊田市和紙のふるさとを筆頭に、おかざき世界子ども美術博物館、愛知県陶磁資料館、高浜市やきものりかわら美術館を紹介した。

最後に、愛知県民・豊田市民が誇る街角アートスポットとして、世界的建築家・黒川紀章設計の豊田大橋、

豊田スタジアム、名古屋市美術館を取り上げた。市の中心部に位置するこの橋とサッカー場は、よく通るわりに、手がけたのが黒川紀章であることは知られていない。ぜひ、素敵なデザインをいろいろな角度から眺めて、美しさを感じてほしいし、わが町をもっと好きになってほしい。

この夏、美術室から発信したアート情報が、美術と地域を愛するきっかけとなったなら、生涯教育にわずかながら一石を投じたことになるかもしれない。



H25 夏のアート情報

今月の

# 見つけたよ!



## 「春のうたがきこえてくるよ」

神奈川県横浜市立下田小学校 5年生

### 作者：

弱い雨が降って、その後に涼しい風が吹きました。花や風は、リズムに合わせて歌っているみたいです。白いクレヨンの上から絵の具をぬって綿毛が見えるようにしたり、筆をシュッと動かして風が吹いているように表したりしました。

### 指導者：

絵本『わたしのワンピース』の読み聞かせから“自分だけの春色のシャツをつくろう”と投げかけました。風や光など、目に見えない春を表すため、“どんな春を感じた？”と対話を重ねたり、今まで経験した技法を用いることができるよう場の設定をしたりしました。

## 地域のアート

### 「光をデザインしてみよう～ランプシェード～」

青森県中泊町立小泊小学校 なかとまり こどまり 齊藤 さいとう みつまさ 光正



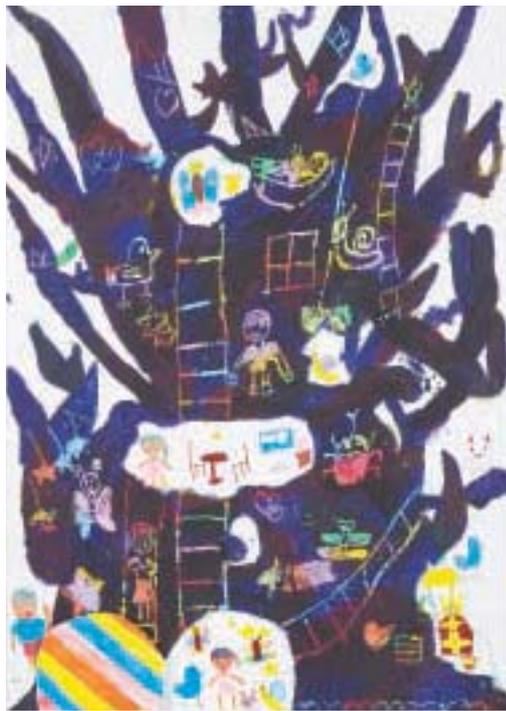
青森県名産のりんごの枝を使ってランプシェードをつくりました。貼っている紙には落ち葉を挟み込んでいます。



「ロバを見る女の子」  
(色画用紙、包装紙、クレヨン / 27×39cm)  
石川県金沢市立杜の里小学校 2年生



「寒」  
(ミクストメディア〈絵の具〉 / 19×13cm)  
山形大学附属中学校 3年生



「にぎやかな楽しい木」  
(アクリル絵の具、クレヨン、カラーペン / 54×38cm)  
滋賀県大津市立瀬田南小学校 3年生



「ミュージックワクワク村」  
(色画用紙、クレヨン / 38×54cm)  
北海道えんがる遠軽町立遠軽小学校 5年生



**開隆堂出版株式会社**

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

北海道支社 〒060-0061 北海道札幌市中央区南一条西6丁目11番地札幌北辰ビル8階 ☎011-231-0403  
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町1-11-1 萩野町Mビル2階 ☎022-782-8511  
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区豊か丘元町14番4号 豊か丘プラザビル6階 ☎052-7894-1741  
大阪支社 〒550-0013 大阪府大阪市西区新町2-10-16 ☎06-6531-5782  
九州支社 〒810-0075 福岡県福岡市中央区2-1-5 F Y C ビル3階 ☎092-733-0174